

はじめに

本書は、英文法について書かれた本です。しかし、「この文では、過去形と現在完了形のどちらを使うほうがよいか」、「“two weeks later”と“in two weeks’ time”の違いは何か」、あるいは、「この状況では、“a”と“the”のどちらを用いるべきか」といった些細なことがらは扱っていません。

私は本書で、英文法に関わるさまざまな論点の中でも、「高次元」と称されるようなものばかりを、日本語との比較という観点を加えて取り上げています。

その中のいくつかについてふれば、第1章（「中間動詞」と「中間態」）では、「中間動詞」という概念を導入し、論じています。みなさんは、今まで、それと気づかずに、多くの中間動詞を学んできたはずですが、しかし、中間動詞の概念を明らかにすることにより、その用法や文型の難しさから、みなさんを悩ませてきたいくつかの動詞について理解していただければと思います。その理解が、みなさんのこれからの英語に対する取り組みに役立つことを期待します。

第2章（動詞はどこまで「軽く」なれるか）での議論は、文法書や教科書、その他の参考書で述べられてきた、「これはイディオムである」とか「動詞 take にはたくさんの意味がある」という旨の言及と関係の深いものです。実際、take をはじめとするいくつかの動詞にどうして多くの意味があるのでしょうか。

第3章～第5章では、英語の動詞は何種類に分類できるか（実

際は6つのグループがあります)、そして、それらのグループはどのようなものかについて論じています。さらに、この観点から英文法をとらえることが、英文法のある種の難しさを解明してくれる新たな灯火になることを示しています。

その具体的な例をあげれば、第4章(頭や心の中の出来事に関わる動詞の特性)では、思考と感覚に関わる動詞の文法について、いくつかの部分を取り扱っています。また、第5章(speakとtalkは発言に関わる動詞か)では、speakとtalkが発言に関わる動詞か行動のタイプに関わる動詞かについて論じています。この種の疑問に対して答えを考えることが、英文法の重要な部分を明らかにしてくれるでしょう。

第6章(“have a headache”を「頭痛を持っている」と訳せない理由)では、英語と日本語における「所有」の本質について論じ、比較考察を行っています。英語における所有の概念、および、それが日本語における所有とどのように異なるのかを理解することが、英語学習者に(また、同様に日本語学習者にも)重要であることを示しています。

発音についての第12章(今すぐ発音がよくなる方法)は「英文法」というタイトルから大きく離れているように思えるかもしれませんが、この章は、「もし、あなたが英語をマスターしたければ、自分の身の回りで聞こえる言語に注意深く耳を傾け、真似をしなさい」という狙いを一種のたとえ話ふうにしたものです。この意味において、この章は本書の趣旨に外れていないと思います。

本書で私が取り上げた論点の多くは、「標準的な」文法書、あるいは「学校文法」の本では、あまり見かけないものであり、

それらによりなじみの深い読者のみなさんにとって、かなり斬新に映ることでしょう。それにもかかわらず、これらの論点の多くは、これまでも、ひょっとしたら何年にもわたって、みなさんの頭の片隅に潜み続けてきたものと思います。しかしながら、みなさんのほとんどは英文法や言語学の専門家でないため、それらの論点を追求する時間がなかったり、あるいは、そこまでの気持ちにならなかったのかもしれませんが。

本書を通読することにより、このような、みなさんが今まであいまいなままやり過ごしてきた潜在的な疑問点の多くが解決され、みなさんの英語全般に対する理解や洞察が、さらに深められることを祈ります。

2005年1月

クリストファ・バーナード
Christopher Barnard